

## 権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築

Reinventing the Study of Andean Civilization through  
Analysis of the Foundation of Power

關 雄二 (SEKI YUJI)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授



### 研究の概要

50年以上続く日本のアンデス文明研究の成果を踏襲しながらも、権力という新たな分析視点と分野横断的な手法をマイクロ・レベルの考古学調査に導入し、文明初期における複合社会の成立過程（メソ・レベル）を追究するばかりでなく、人類史における文明形成というマクロな課題に取り組むことにある。

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：考古学、文化人類学、文明、複雑社会、権力

### 1. 研究開始当初の背景

部族から国家へという、かつて隆盛をきわめた進化的見方が、個々の文化の脈絡を重視する研究の前に衰退すると、文明研究も停滞する。しかし、現在では手法も精緻化され、地域的な多様性を押さえた上で比較を行う文明研究が盛んになりつつある。

### 2. 研究の目的

50年以上続く日本のアンデス文明研究の成果を踏襲しながらも、権力という新たな分析視点と分野横断的な手法をマイクロ・レベルの考古学調査に導入し、文明初期における複合社会の成立過程（メソ・レベル）を追究するばかりでなく、人類史における文明形成というマクロな課題に取り組むことにある。

### 3. 研究の方法

アンデス文明初期にあたる形成期（前3000年～紀元前後）に焦点を絞り、ペルー北高地に位置するパコパンパ祭祀遺跡の調査し、遺構、出土遺物の分析を、考古学のみならず理化学を含む分野横断的体制の下で進める（マイクロ・レベル）。その際、経済、軍事、イデオロギーという権力資源を同定し、資源の組み合わせと権力形成に注目する。また同時期、さらには後の国家社会との比較を国際集会を利用しながら実施し、権力を通してみたアンデス文明史を構築する（メソ・レベル）。さらにアンデス文明形成に関わるデータを、中米および旧大陸の文明形成過程と比較するため研究集会を開催し、アンデス文明を相対化する作業も併せて行う（マクロ・レベル）。

### 4. これまでの成果

マイクロ・レベルで最も精力を注いだのは、ペルー北高地に位置するパコパンパ遺跡の発掘調査および、出土遺物の分析である。

経済面では、土器の付着物と人間の歯石に残ったデンプン粒の同定により、高地性のトウモロコシの利用が後期に高まることが検出された。トウモロコシ利用は、人骨の炭素・窒素同位体分析でも析出された。また高地性家畜であるラクダ科動物の出現が、植物性食糧の変化と連動する点もわかった。

奢侈品経済では、出土量が際立つ銅製品において、工具類や鋳滓、鋳型の存在から製作そのものが行われた点を検出した。また孔雀石、珪孔雀石、藍銅鋳などの銅の二次鋳物の鋳山を発見し、採取した試料を用いた実験により精錬銅の製作に成功した。こうした銅製品生産の全体像を解明する研究は、これまでにない独創的なものと言える。

軍事面における証拠は得られていないが、イデオロギー面では数多くの証拠が得られた。とくにトータルステーションによる遺構と地形の測量は、建築軸の方向とアンデスにおいて農耕の開始を告げる星であるスバルの出現場所との一致を明らかにした。祭祀空間が豊穡性と結びついていることになる。

また経済面であげたトウモロコシは、食糧のほか、アンデスの祭祀に必要な酒の材料となり、また銅製品は儀礼用具であった可能性もある。このため、酒の醸造関係の土器の分析や出土コンテキストの解析を進めている。

また権力生成の観点から、貴人墓の被葬者の自然人類学的分析を実施したところ、頭蓋変形が検出された。頭蓋変形が生後直後の処置を必要とする点、限られた被葬者に認められる点を考慮するならば、被葬者の誕生時に社会的地位は決定していたことになる。

こうした社会的差異については、クントゥル・ワシ遺跡の複数の墓より出土した金製品の組成を蛍光X線解析した結果とも呼応する。中心軸上に近い墓ほど金の組成比率が高く、金製品の質と被葬者の社会的地位との相関関係が認められたのである。

上記のマイクロ・レベルの研究により、前800年頃に権力が発生した点が明らかになり、ペルー北部の遺跡との比較でもこの点が確認できた。しかし、細部に目を向ければ、パコパンパのような金属製品の生産に重きを置くケースあれば、長距離交易を重視するケースもあり、権力基盤に地域性が認められた。今後は個別の成果発表とともに、権力形成に視点を据えた総合報告書を作成していく。

メソ・レベルとして、国際集会を6回開催した。とくに国際アメリカニスト会議において「アンデス形成期における社会の複雑化」と銘打ったシンポジウムをイェール大学とバルセロナ大学と共同で組織し、アンデス各地の形成期社会像を比較した。ここでも権力発生の同時性が確認された反面、権力基盤の多様性が論じられた。また形成期遺跡を代表するチャビン・デ・ワンタル遺跡を近年発掘しているスタンフォード大学のチームを招へいし、ワークショップを実施し、本研究の意義を国際的に訴えることができた。

さらにアンデス文明でも、後700～1000年にかけて広大な王国を築いたワリと、後200年～700年頃に成立し、地上絵で有名なナスカの社会を対象に、海外研究者とともにワークショップを開いた。とくに欧米研究者が唱える中核地と周辺の関係、中核地への巡礼というテーマは、本研究が目指す地域的多様性を前提にしたときに説得力をもちうるのかが議論の焦点となった。文化の連続性や同質性を前提とする従来の研究に本研究が再考を促す形となった。出版を予定している。

マクロ・レベルでは、中米のマヤ文明、テオティワカン文明、および西アジア文明を対象に計5回の研究集会を開催した。その際、経済的基盤と祭祀との関係に限定して議論を進めた。マヤ文明においては、祭祀建造物の出現の前提としてトゥモロコシ農耕を置く経済重視の姿勢が強かったが、西アジアでは、近年、採集狩猟段階で定住化と、巨大な祭祀建造物の誕生が報告されている。西アジアの文明形成で主流となっていた唯物史観が、西アジアそのものですでに見直されている点を確認できたことは、本研究の意義を高めることにもつながった。成果については、現在、一般書として出版の準備中である

## 5. 今後の計画

マイクロ・レベルとしては、パコパンパ遺跡の遺構と出土遺物の分析をさらに進めるとともに、これまで析出してきたデータを連関させ、権力生成についての見通しを立てる。同時に北部遺跡からのデータと比較を行う。

メソ・レベルとしては、イェール大学とともに国際アメリカニスト会議で形成期の公共建造物の伝統に関するシンポジウムを開催し、またワリとほぼ同じ時期に成立したティワナク社会に関する研究集会を開催する。

マクロ・レベルとしては、エジプトや中国の古代文明との比較を実施する。いずれのレベルでも出版を積極的に行っていく。

## 6. これまでの発表論文等(受賞等も含む)

(1) *Centro ceremonial Andino: Nuevas perspectivas para los Arcaico y Formativo* (SES No.89). Seki, Yuji (ed.). National Museum of Ethnology, 査読あり, 印刷中, 2014.

(2) *Diversidad del poder en la sociedad del Período Formativo: Desde el punto de visita de la sierra norte*. Seki, Yuji. *Centro ceremonial Andino: Nuevas perspectivas para los Arcaico y Formativo* (SES No.89), 査読あり, 印刷中, 2014.

(3) アンデス文明形成期の金属製品の製作に関する一考察—クントゥル・ワシ遺跡およびパコパンパ遺跡出土の金属製品の蛍光X線分析の結果から—。日高真吾, 関雄二, 橋本沙知, 椎野博. 『国立民族学博物館研究報告』, 査読あり, 38巻2号, pp. 125–185, 2014.

(4) *Análisis de arcillas y material comparativo por medio de difracción de rayos X y petrografía para Kuntur Wasi, Cajamarca, Perú*. Druc, Isabelle, Kinya Inokuchi y Zhizhang Shen. *Arqueología y Sociedad*, 査読あり, No.26, pp.91-109, 2013.

(5) *A Case Study of a High-status Human Skeleton from Pacopampa in Formative Period Peru*. Nagaoka, Tomohito, Yuji Seki, Wataru Morita, Kazuhiro Uzawa, Diana Aleman Paredes, Daniel Morales Chocano. *Anatomical Science International*, 査読あり, No. 87, pp.234-237, DOI 10.1007/s12565-011-0120-z, 2012.

(6) ペルー、パコパンパ遺跡から出土した人骨の生物考古学的研究。長岡朋人, 森田航, 関雄二, 鶴澤和宏, 井口欣也, フアン・パブロ・ビジャヌエバ, ディアナ・アレマン, マウロ・オルドーニェス, ダニエル・モラーレス. 『古代アメリカ』, 査読あり, 第14号, pp.1-27, 2011.

ホームページ等

<http://www.r.minpaku.ac.jp/sekito/kaken/s/ekikaken-index.html>